

事例番号 122 まちじゅう博物館でまちづくり(山口県萩市)

1. 背景

萩市は日本海に面する山口県中北部の都市である。その歴史は古く、長門国五郡の一つ「阿武郡」として日本書紀にも登場する。中世には大内氏、毛利氏が治める地として文化が栄えた。1604年には西軍だった毛利輝元がこの地に移封され、以来260年余、萩は毛利氏の城下町として栄えた。特に藩校明倫館を創設して文武を奨励し、幕末には吉田松陰が松下村塾を主宰したこともあって多くの志士を輩出した。現代の萩市の形は、明治22年の「明治の大合併」、昭和30年の「昭和の大合併」を経てつくられ、さらに2005年(平成17年)3月に1市2町4村が合併して新「萩市」となった。

萩市は日本海に注ぐ松本川と橋本川に挟まれた三角州を中心に発展した城下町で、今でもその風情をよく残している(日本で稀有の「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」と言われる)。藍場川の清流が市内を縦断し、北は紺碧の日本海、東・西・南は緑深い山々に囲まれている。市内には、萩城跡(国指定史跡)、菊屋家住宅(国指定重要文化財)、木戸孝允旧宅、高杉晋作誕生地、青木周彌旧宅、久保田家住宅等数多くの歴史遺産がある。堀内地区(口羽家住宅等の武家屋敷、天樹院、土塀等)、平安古地区(田中義一別邸、鍵曲等)、浜崎地区(梅屋七兵衛旧宅、商家の町並み等)の3地区は「重要伝統的建造物群保存地区」に、藍場川周辺地区(旧湯川家屋敷、桂太郎旧宅等)他6地区は「歴史的景観保存地区」に指定されている。旧松本村には吉田松陰の誕生地、松下村塾、伊藤博文旧宅や別邸、東光寺(毛利家の菩提寺)等がある。その他、西堂寺六角堂(県指定有形文化財)、森田家住宅(国指定重要文化財)等、萩市内には数多くの歴史的、文化的資産があり、指定文化財の数は200に達する(国指定文化財38)。

萩市のこのような豊かな自然、歴史、文化環境は、高度成長期以降の急激な都市開発で大幅な後退を余儀なくされてきた。文化的価値があるものでも気がつかないうちに失われてきたものが多く、市内の有形、無形の価値あるものが消滅してきた。まちの風情も画一的な近代化の波に洗われて失われてきた。一方、萩市にとって観光ははやくから重要な産業のひとつであったが、最近では観光客数、宿泊客数ともに大幅に減少してきている。特に、萩市で宿泊して市内をゆっくりと観て回る形の観光が激減してきた。

このような中、萩市の活力も低下してきた。人口は若年層の流出、少子化、高齢化により減少を続けてきたが、その傾向は今後も続く見込まれている。新市を構成する市町村の高齢者(65歳以上)人口割合は2000年に27.9%であったが、2015年には36.6%になる見通しである。

以上のような状況に対し、文化財の保護、観光の振興、及びまちの活性化を同時に追求する仕組みとして「萩まちじゅう博物館」の考えが出てきた。

2. 目標

萩市では「新市」のまちづくりの将来像を「自然と歴史、文化に抱かれた健やかでうるおいのあるまち」としている。これは、市民の「市の豊かな自然、歴史、文化を尊重し、後世に伝えていこう」という意思と「健やかでうるおいのあるまちづくり」を望む声とを尊重して表現したものである。そして、まちづくりの基本理念を①市民主体のまちづくり、②地域特性を活かしたまちづくり(自然環境、歴

史・文化資源等)、③課題に取り組むまちづくり(福祉施策、産業振興策、定住の促進等)、④一体性をめざすまちづくり(地域間交流の活発化等)としている。

「萩まちじゅう博物館」の考えの背景に、このようなまちづくり全体の理念、将来像がある。



萩市の位置 (資料:萩市)



萩市中心部 (資料:萩市)

3. 取り組みの体制

「萩まちじゅう博物館」の「主人公は萩に住む人々」と説明されているが、具体的な運営は NPO 萩まちじゅう博物館と萩市まちじゅう博物館推進課が連携して行っている。この 2 つの組織を核に、市民、民間事業者、行政がネットワークで結ばれるという考え方である。

4. 具体策

(1) 「萩まちじゅう博物館」の基本的考え方

「萩まちじゅう博物館」の基本構想は 2003 年 10 月に「萩市まちじゅう博物館整備検討委員会」により承認されている。その基本的な考え方は「萩市まちじゅう博物館ホームページ」(萩市まちじゅう博物館推進課・NPO 萩まちじゅう博物館・萩博物館)に次のようにわかりやすく説明されている。

萩は、たくさんの文化財をはじめ、「まちじゅう」に豊かな文化や歴史、自然の「おたから」があるところ。それらのおたからを、現地でありのままに展示・保存されている資料と考えると、萩のまちは、まるで屋根のない広い博物館＝「まちじゅう博物館」とみなすことができます。

「萩まちじゅう博物館」は、萩の魅力を萩にすむ人々が再発見するとともに、かけがえのない「萩のおたから」を守り育てながら、誇りをもって次世代に伝えていこうとする新しいまちづくりの取り組みです。



「萩まちじゅう博物館」のコンセプト (資料:萩まちじゅう博物館)

この「おたから」には、「自然のおたから」(海、島、山、河川、湖沼、森林など)、「文化のおたから」(町並み、建造物、古墳、生活文化、祭りなど)、「産業のおたから」(地場産業、伝統工業、鉱山跡、農場など)があり、「萩まちじゅう博物館」の対象は「博物館」からイメージされる範囲を遥かに超えてその場所にある価値あるもの全部とも言い得るものとなっている。

(2) 「萩まちじゅう博物館」の具体的事業

以下の事業が行われる。

- ① 研究・保存(おたからのデータベース化、管理、再発見・新発見、保存・保全)
- ② 展示・情報発信・活用(現地でありのままにおたからを展示・解説、情報発信・公開、おたからの特性を生かした公共空間づくり)
- ③ 拠点整備と周辺整備(コア、サテライト、トレイルの整備)
- ④ 「心のふるさと・萩」のおもてなし(「もう一度行きたい」「住んで良かった」と思えるようなおもてなし活動)

(3) 「萩まちじゅう博物館」の空間構成

「萩・まちじゅう博物館」は次の3つの空間構成を持つ。

- ① コア(まちじゅうへの出発点、情報拠点としての萩博物館、2004年11月開館)
- ② サテライト(地域にあるおたからやその場所＝まちじゅうの展示室)
- ③ トレイル(サテライトを様々な物語でめぐる散策路「発見の小径」)

この構成の下で「萩のまちを歩くことによっておたからを体験する」システムを「コア・サテライト・トレイルシステム」と呼んでいる。具体的な「発見の小径」には、例えば「城下町・萩」の物語でつないだ8つの発見がある小径などがある。



萩博物館 (資料:萩博物館)

(4) 「特定非営利活動法人 NPO 萩まちじゅう博物館」設立

「萩まちじゅう博物館」構想の要となるのは、都市の中に残るさまざまな遺産の情報を収集管理し、情報発信する活動である。その役割を担う組織として 2004 年 6 月に「特定非営利活動法人 NPO 萩まちじゅう博物館」が設立された。同法人は「市民及び行政と協働して、萩市の都市遺産を再発見し、その情報の管理や活用などを行うことで、都市遺産を守り育て、次世代に継承していくこと」を活動目的に掲げており、具体的には次の 5 つの事業を行う。

- ① 「萩まちじゅう博物館」における都市遺産の再発見や管理、活用に関する事業
- ② 「萩まちじゅう博物館」における都市遺産情報の登録や管理、発信に関する事業
- ③ 「萩まちじゅう博物館」の拠点施設である萩博物館などの管理運営に関する事業
- ④ 行政や公共機関が行う「萩まちじゅう博物館」の推進に関する事業
- ⑤ 市民活動に関するアドバイス事業

これらの事業は、「まち博推進班」、「研修班」、「萩博ガイド班」、「まち博ガイド班」、「花と緑の推進班」等の班に分かれて行われている。また、同法人は萩博物館のレストランやショップを運営している。また、2005 年 2 月から萩市と共同で「ワンコイントラスト運動」を展開している（寄付箱を市内 8 箇所に設置）。

5. 特徴的手法

伝統的な生活様式等を、そのままの形で文化的価値のあるものとして再発見し、それらをネットワークで有機的に結んでそれぞれの価値が相乗的に高まる工夫をし、それを維持するためのヒューマンウェア、ソフトウェア、ハードウェア各面における戦略的な取り組みをしている。落ち着いた生活空間を維持しながらまち全体を観光の対象として活性化する取り組みの先駆的事例として、他の多くのまちの参考になるものと考えられる。

6. 課題

落ち着いた生活と活発な観光との両立を確保するための仕組みづくりを、実施過程において今後とも引き続き図っていくことが課題である。

(参考・引用文献)

萩市ホームページ

萩博物館ホームページ

萩市まちじゅう博物館ホームページ

特定非営利活動法人 NPO 萩まちじゅう博物館ホームページ

日本建築学会編『町並み保全型まちづくり』丸善、2004 年